

日米の高校用歴史教科書における記述の比較——日本史におけるアメリカとアメリカ史における日本に関する記述について

上 林 喜 久 子

I 研究目的と方法

1. 目的

前回の報告¹⁾で著者はアメリカの高校用アメリカ史の教科書で日本に関する記述を調べてアメリカでは高校教育の場を通してアメリカ人に日米関係をどのように認識させ、また、どのような立場から日本ならびに日本人について教えているかについて述べた。

本報告では、前回の報告に引き続いて日本とアメリカの高校用歴史教科書を対象として、日本史（日本）の中のアメリカに関する記述と、アメリカ史（アメリカ）の中の日本に関する記述を調べてその特徴の比較を試みた。特に、日本とアメリカがペリーの来航以来、太平洋戦争をはさんで今日までの関係に至る歴史の間で、各々の相手国について自国の歴史背景のもとに何を、どのように教えているかについて注目した。

このような比較研究を通して、各々の国民にその国の歴史に関する国民的教育を行ない、ひいては他の国との関わり合いについての国民的理解を与えようとする日米両国のありかたを考察しようとした。

2. 調査した教科書の分析方法

調査、分析の対象とした教科書は日本ならびにアメリカにおける高校生用日本史（日本）およびアメリカ史（アメリカ）である。

日本史は、1951年から1971年にかけて出版された教科書を使用した。これらは、東京書籍株式会社の教科書コレクション索引カードの高校日本史の頃から全部で73冊をとり出した。高等学校学習指導要領社会科の改訂は1947年、1951年、1955年、1959 ならびに1969年に行われており、それに従って教科書の書き換えが行われている。著者はこれら73冊を調査し同一著者あるいは共著者による再、改訂版に著しい記述変化が認められないことを踏まえ、同一著者あるいは同一共著者による再、改訂版を省き、全部で24冊を選んだ。この24冊の出版社の数は19社である。

アメリカ史の教科書は、日本史と同様1972年から1972年にかけて出版されたものを使用した。まず“Bibliograph of Textbooks in the Social Studies”,²⁾ *The American Educational Catalogue*³⁾ および *Textbooks in Print*⁴⁾ の中の高校、アメリカ史の分類項の中から全部で100冊抽出し、この中から日本史同様、同一著作で再版されたものを数冊を例外にして合計64冊を選んだ。64冊の出版社数に27社であり、一社が最高7冊（最底1冊）の著者の異なる教科書を出版している。

これらの日本史およびアメリカ史は著者の数、出版社の分布状態から考えて本報告の研究目的には適った代表的国史教科書と考え得る。

これらの教科書の記述内容の比較調査は次の三つの方法と立場から行なった。

第一に、日本史およびアメリカ史の中で各々相手国に関するどのような種類の記述事項を掲載しているか調べるため、アメリカ（日本史）と日本（アメリカ史）に関する記述事項をすべてとり出しそれらを歴史的トピックスに分類、整理した。第二に、（日米）の教科書が全体として第一で分類されたトピックスのうち、どのトピックスを強調してとりあげているかその度合を考察するため各教科書の歴史的トピックスへの記述頻度を調べた。第三に、歴史的トピックスのいくつかについてその記述内容を検討し、各々の教科書が相手国に関して記述する場合の表現、立場、ならびに傾向について考察した。

Ⅱ 日米の歴史教科書の中の日本とアメリカに関する 歴史的トピックスの分類と比較

日本史とアメリカ史の中で、各々相手国との歴史的邂逅についてなされた記述事項のすべての種類を調べるため次のことを行なった。

まず、日米の教科書中、各々相手国に関してなされた記述事項を全部とり出しそれらを歴史的年代順にトピックス毎に分類、整理して表1を作成した。その結果(表1)主トピックスはペリーの来航によって始まった日米間の主な歴史的交渉と事件をそれらが起った順に11の主トピックスとさらに文化の項を加えて合計12に分類された。各主トピックスはさらに幾つかの副トピックスに分類される。たとえば、“日本の開国”の主トピックスは日米の教科書ともそれぞれペリー来航時の日米の国内状況、ペリーの開国要求、ハリスの交渉、開国のインパクト等を含む。

表1にみられる日米の教科書の主、ならびにそれに付随する副トピックスを比較すると全体としてこれらのトピックスの種類と数は共通しており、

表1 日本史およびアメリカにおける歴史的トピックスの分類

主トピックス	教科書	副トピックス
1 日本の開国	日本史	ペリー来航時のアメリカ、ペリーの来航、ハリスの交渉、下関襲撃事件
	アメリカ史	鎖国、ペリーの来航、ハリスの交渉、日本の近代化
2 日清戦争	日本史	門戸解放政策、ハワイ併合とフィリピン領有
	アメリカ史	日本の中国進出、三国干渉、門戸解放政策と日本、ハワイ、フィリピン領有と日米関係
3 日露戦争	日本史	T. ルーズベルト大統領と日露戦争、日露戦争後の日米関係
	アメリカ史	日露戦争と日本、T. ルーズベルト大統領とポーツマス会議、日露戦争後の日米関係、ルート・高平協定

主トピックス	教科書	副トピックス
4 日系移民	日本史 アメリカ史	アメリカの日系移民, 反日系移民運動, 移民規制法と日米関係 アメリカの日系移民, 反日系移民運動, サンフランシスコ市日系移民児童登校拒否事件, 紳士協定, 排日系移民法, 第二次大戦中の日系移民強制収容
5 第一次世界大戦	日本史 アメリカ史	アメリカの抬頭, ヴェルサイユ会議, ウィルソンと国際連盟, モンロー主義, 対華21ヶ条とアメリカ, 石井ランシング協定, シベリア出兵 日本の参戦, 対華21ヶ条と日本, 石井ランシング協定, シベリア出兵
6 海軍軍縮会議	日本史 アメリカ史	背景, ワシントン軍縮会議, ロンドン軍縮会議, ジュネーブ軍縮会議 背景, ワシントン軍縮会議, ロンドン軍縮会議, ジュネーブ軍縮会議
7 満州事変	日本史 アメリカ史	世界恐慌とニューディール政策, 米中関係, 日米関係 日本の国内事情, 満州国, 国際連盟と日本, スティムソンドクトリンと日本
8 日中戦争	日本史 アメリカ史	日本の南進とアメリカ (日米通商条約, 資産凍結, ABCDライン, 米中関係) 日本の国内事情, 三国軍事同盟, 大東亜圏新秩序, 日本の南進, 日米経済関係
9 大太平洋戦争	日本史 アメリカ史	日米交渉, 真珠湾攻撃と戦略の推移, 連合国会議, 原子爆弾の投下と日本の降伏 日米交渉, 真珠湾攻撃と戦略の推移, 連合国会議, 原子爆弾の投下と日本の降伏
10 日本の占領	日本史	占領管理, 占領による改革プログラム, アメリカによる日本経済再建, 朝鮮戦争と警察予備隊, サンフランシスコ講和条約, 日米安全保障条約

10 日本の占領	アメリカ史	占領管理, 占領による改革プログラム, 占領政策評価, 朝鮮戦争, サンフランシスコ講和条約, 日米安全保障条約
11 占領終了後から現在の日米関係	日本史	米ソ対立, マーシャル計画, 西太西洋条約機構, 日米関係, 日米安全保障条約改正とアイゼンハワー大統領の訪日中止,
	アメリカ史	日米安全保障条約改正とアイゼンハワー大統領の訪日中止, 日本の経済復興, 沖縄返還
12 文化交流	日本史	日本の近代化とアメリカの諸制度の紹介, キリスト教の普及, アメリカ文化の普及(映画, ラジオ, 建築様式) フェノロサと美術
	アメリカ史	ライトと帝国ホテル建築, ラフカディオハーンと日本, 日系移民, 日本の風土と経済, 日本の政治構造

またそれらの配列の順序にも同様のパターンがみられる。特に、日本とアメリカが直接、あるいは間接に戦争に関ったトピックスについては、各々相手国の国内事情、戦争の背景、それに伴う国策ならびに日米関係への影響等の副トピックスが認められることは注目される。

このことは、極く一般的に捉えて、日米の歴史教科書共に、日米間で起った歴史的諸問題のすべてを教科書に採り入れようとする現われでありまた、両国の歴史的邂逅の意味が各々の教科書によって認識されていると共に両国の教科書がほぼ同じ対象について日米の関係を教えていることが考えられる。

Ⅲ 日米の教科書の主トピックスへの記述頻度の比較

日米の教科書中の各々の相手国に関する記述事項に類似性が認められたがその中でも特に強調されているトピックスについて考察するため次のことを行なった。

表1で分類された12の主トピックスについて日本史24冊とアメリカ史64

冊がそれぞれ言及している冊数を調べその記述頻度を調査した教科書の冊数に対してパーセンテージであらわして表2に整理した。

表2 主トピックスの記述頻度の比較

記載頻度 主トピックス	日本史 (%)	アメリカ史 (%)
1. 日本の開国	100	82
2. 日清戦争	21.6	82
3. 日露戦争	100	87
4. 日系移民	50	95
5. 第一次世界大戦	100	75
6. 海軍軍縮会議	100	85
7. 満州事変	24	85
8. 日中戦争	100	87
9. 太平洋戦争	100	100
10. 日本の占領	100	70
11. 占領終了後から現在の日米関係	91	29
12. 文化交流	100	7

このことを通して1), 日本史ならびにアメリカ史が各々最も強調してとりあげているトピックスの比重を判断することができ, さらに2), 日米の教科書の各主トピックスへの記述頻度の差を比較することによって双方の教科書が重視しているトピックスの比重が判断し得る。例えば, ある主トピックスについてその頻度 (%) の差が大きければ日米の教科書の関心に隔りがあることがわかり, 逆にその差が小さければ双方の教科書にとって関心のあるトピックスと言えよう。

表2中, まず日本史およびアメリカ史が各々強調してとりあげているトピックスについては次のことが言える。

日本史ではペリーの来航, 日露戦争, 第一次世界大戦, 海軍軍縮会議, 日中戦争, 太平洋戦争, アメリカの日本占領がすべて100%の頻度でとりあげられており続いて戦後の日米関係が91%と続く。これらに対して移民50%, 満州事変24%ならびに日清戦争21.6%は前述の諸トピックスに比べ

て極めて小さい頻度を示している。このように日本史では、日清戦争、移民、満州事変を除いた残りの主トピックス間に頻度の差がなく、どのトピックスも一様に強調されてとりあげられていることが特長である。

他方、アメリカ史では、各トピックス間の強調の比重は日本史と比べてばらつきがみられる。太平洋戦争が100%の頻度を示し、続いて移民が95%と高い頻度を示していることは注目される。ついで日露戦争、満州事変、日中戦争がともに85%前後の頻度を示しており、ペリーの来航、日清戦争、第一次世界大戦と続き、戦後の日米関係は29%と他のトピックスに比べて一番小さくその頻度は29%となっている。

次に、各トピックスについて日米の教科書の記述頻度の差を検討する。

表2から三つのことが言い得よう。第一に、日本とアメリカにとって共通に関心の高いトピックスは、日中戦争から太平洋戦争と日米間の最大衝突に関連するトピックスがまずあげられ、ついで“準”軍事的トピックスとも言え、かつ日米間の国益に間接的に関連する海軍軍縮会議と日露戦争があげられさらに、日米の国交開始の緒口となったペリーの来航がある。第二に、アメリカにとって日本より関心のあるトピックスにアメリカの対中国そして日本政策の基本国策と言える門戸解放政策を含む日清戦争ならびに、移民国家と言われるアメリカの社会を反映した日系移民の諸問題に関するトピックスがある。第三に、日本にとってより関心のあるトピックスにアメリカの世界への抬頭が明白となった第一次世界大戦と、戦後の日本社会へ大きな影響を与えたアメリカによる日本の占領ならびにそれ以後現在に至る日米関係の諸問題に関するトピックスがある。

このような記述頻度にみられる日本史ならびにアメリカ史の共通点は双方とも、日米間の軍事的ならびに“準”軍事的衝突に関するトピックスに強調の比重がおかれていることである。このことは、今世紀の日米関係が太平洋戦争と言う対決を経験したことから当然予想されよう。一方、アメリカ史が日清戦争と移民に関した日米関係を、日本史が第一次世界大戦と占領ならびに占領終了以後現在に至る日米関係を各々強調していることは、

両歴史教科書共各々、自国にとって重要と思われるトピックスを中心に置いて日米関係を記述し、そのことを生徒に教えようとしていることが分かる。

IV トピックスの記述内容の比較

日米の歴史教科書に記述されているトピックスの分類を中心にそれらの強調の相違点を検討した。相違点の由来するところは、これらトピックスの記述内容ならびに表現とも関連していると考えられるので以下、いくつかのトピックスの扱い方の記述を比較しその特色ならびに傾向を考察する。

1. 戦争に関連したトピックスの扱い方

A) 日清戦争

アメリカにとって日本より関心の強いトピックスの第一に日清戦争がある。

日本史では日清戦争に関連してなされているアメリカについての副トピックスは、アメリカの門戸開放政策と、アメリカによるハワイ、フィリピン諸島の領有の二つだけであり、20年間を通して24冊中9冊のみが記述している。これら9冊の記述は主としてヨーロッパ諸国による中国分割にたち遅れたアメリカが1899年ハワイを併合後フィリピン群島を領有し極東に強固な地位を築き、門戸開放政策を唱えて将来の経済進出への気構えをみせ中国分割に介入してきたと当時のアメリカの状況を一般的に短かく述べているにすぎない。

これに対してアメリカ史では過去21年間64冊中53冊が日清戦争について言及し、門戸開放政策を中心にハワイとフィリピンの領有、日清戦争の背景——ロシアを含めて——と、戦争経過、三国干渉ならびに日清戦争後の日米関係等の副トピックスについて記述している。

日本史では日清戦争時におけるアメリカについて一般的客観的記述に終

始しているのに対してアメリカ史では、日本の行動を否定的立場で把握していることが注目される。例えば、日清戦争後の日本は世界に東洋における最強かつ優性な国として抬頭したが、それは“危険な野望”⁶⁾ (imperious ambitions) と表現され、すでに列強によって分割のすすんでいる中国に“東洋で抬頭する日本の侵略的行為” (aggressive action of the rising powers of Japan in the Orient)⁶⁾ が介入したと述べられている。そしてアメリカの唱える門戸解放政策が日本の進出によって“侵犯” (violate) されあるいは“無視” (disrespect) されたとする記述が多い。

日本の中国大陸での行動を侵略的にとらえまた、日本を門戸解放政策の侵犯者と描写することはアメリカ史が日清戦争以後、中国大陸をめぐる日米の衝突——海軍軍縮会議、満州事変、日中戦争から太平洋戦争——のトピックスの中でくり返し記述するパターンである。

しかし、このような傾向の中で1950年後半以降の6冊のアメリカ史が日清戦争を新しい角度で記述し、その中で日本とアメリカが共にヨーロッパの旧勢力にとって代る新興国として国際政治舞台に抬頭し、旧植民地保有国によってとり残された領土獲得をめざして競争に入り世界の均衡を破り始めたとして述べている。

日清戦争は日本とアメリカが中国大陸をめぐる始めて間接的に接触した事件と時期である。アメリカ史が日清戦争と日本の関りを重視する理由として、この事件が教科書の中でアメリカの対中国政策の基本とも言える門戸解放政策とそれと対決することになる日本について記述する最初の章を構成しているからであろう。このことはすでに触れたように、日本の中国進出に関する記述に一定のパターンが認められることと関連している。結局、この問題を通じてアメリカ史では、日清戦争の時代のアメリカの政策を明らかにする例としてこのトピックスを記述していることになる。

これに対して日本史の中のアメリカに関する記述が極端に簡略なのは日清戦争遂行の当事者として国内の事情を中心に対朝鮮、対清国ならびに対ロシア関係に記述の配分が多く行われているからであろうか。

B) 第一次世界大戦ならびに海軍々縮会議

イ. 第一次世界大戦

日本史ならびにアメリカ史は第一次世界大戦と海軍々縮会議に関して同じ種類と数の副トピックスを含んでいる(表1)。記述頻度についても日本史が第一次世界大戦と軍縮会議と僅かに多いがその差は小さい(表2)。しかし、副トピックスならびに記述頻度にはほとんど同様の傾向を示している双方の教科書もその記述内容は大きく異っている。

日本史では第一次世界大戦をアメリカの抬頭と結びつけて記述していることが注目される。その中で大戦によるアメリカの国力の増進と国際的地位の上昇が卒直に認められている。例えば、大戦中アメリカはその国力は繁栄し充実し、大戦によって得た巨富を擁し、ヴェルサイエ会議ならびに軍縮会議で指導的立場をとり国際政治の立役者となったと述べられている。

これに対してアメリカ史では、日本と第一次世界大戦の関りを極めて否定的に扱っているのが特長である。

日本の参戦は中国大陸に対する領土的野心に基くものとされ、日本は“ただち”に(immediately)、あるいは“すばやく”(quickly)中国のドイツ領を占拠したと述べられている。対中華21ヶ条については多数の教科書は、“悪名高い”(notorious)、“侮蔑的”(insulting)、あるいは“恥死らざるの帝国主義”(shameless imperialism)”と形容し、アメリカが日本の対中国政策に鋭い関心を持っていることを示唆している。同様に、ベルサイエ会議における日本の行動も領土獲得に執心して終始したと記述する傾向が多くみられる。このように、第一次世界大戦は日本とアメリカが共に連合側側に参戦したにも拘らず、その記述は日本史が比較的客観的表現の中にもアメリカの国力抬頭への警戒心を示し、アメリカ史は一方的とも言える強い表現で日本の行動を非難し、各々の国にとって最も関心のある事項を中心に強調して記述しており歴史教科書の国民性を示している。

ロ. 海軍々縮会議

第一次世界大戦の記述傾向と同様の傾向が海軍々縮会議の記述にも認め

られる。

ワシントン海軍軍縮会議の開催目的については、日米の教科書とも一致して列国の建艦競争が新たな戦争へつながる危惧があったと述べている。しかし、これに加えてアメリカ史では中国問題を強調し、大多数の教科書が開催目的に日本の中国大陸での行動を牽制することを加えており、その中で日本が中国に対する侵略性を増しアメリカの門戸解放政策にとって脅威となったと記述している。

ワシントン会議の評価についても日米の教科書は明らかに異なっている。10冊の日本史が軍縮会議の協定により日本の中国大陸と太平洋方面の立場が弱められ、アメリカの国際外交上の軍事的勝利に終わったと評価している。例えば、“アメリカの東洋に対する発言権が強くなり、その反面、中国に対して独占的進出を図ろうとする日本の行動はかなりおさえられた”⁸⁾と述べられている。

これとは逆にアメリカ史では、ワシントン会議の五ヶ国条約を中心にアメリカの不利 (loss) と日本の有利 (gain) を対比して強調しており、その理由として、例えば軽巡洋艦と潜水艦について制約を設けなかったことが日本を決定的に有利にし、またアメリカがフィリピンを始めとする海軍基地の要塞化を止めさせられたことをあげている。

この他、アメリカ史では、ロンドン、ジュネーブの軍縮会議の記述を通して日本は常に条約不履行者、あるいは軍縮会議失敗の張本人と述べる傾向がある。特に、満州事変が始まったことと関連して日本の中国進出が強調され、中国における日本の軍事行動再開は海軍軍縮にかけたすべての成果が放棄されたと述べられている。例えば、“日本はアメリカが全世界的海軍軍縮を遂げようとしたすべての希望を破壊した”⁹⁾と述べ、アメリカの平和的意図と日本の軍事的行為を対比し、アメリカの政策の正当性を強く教えようとしていることは注目に値しよう。

このように日本とアメリカ両国の教科書で第一次世界大戦と同様に軍縮会議に関する記述にも日米の教科書は相異なる解釈を示していることは、

歴史教科書の書かれる視点のひとつに両国の国家的利益の概念の強調、(nationalism)があることを示しているように思われる。

C) 太平洋戦争

太平洋戦争に関する副トピックスには日米の教科書ともにヨーロッパで始まった戦争、枢軸の結成、日本の南進、ABCDラインによる対日経済封鎖措置、日米交渉、日本の真珠湾奇襲と戦争布告、戦略の推移、連合国会議、ポットダム宣言と原子爆弾の投下ならびに日本降伏がある。

これらの中で、日米交渉と原子爆弾の投下に焦点をあて、日米の教科書の記述を比較し、各々の教科書の戦争に関連したトピックスの扱い方について検討する。

イ) 日米交渉

一般に日本史の日米交渉に関する扱い方の特色はその記述内容の短かさ
と簡略さにある。まず、日米交渉の背景として ABCD ラインによる包囲
とアメリカによる対日石油輸出禁止措置にふれ、野村、栗栖がワシントン
に派遣されたという事実を年代順に述べている。日米交渉の会談内容につ
いて具体的に述べている教科書は24冊中4冊のみで、中国からの日本の撤
退が案件にあったとしている。

これに対してアメリカ史の日米交渉の記述の特色は、ハル・野村・栗栖
を中心に交渉の行われた模様を克明に描写していることにある。

日米交渉に臨んだ日本の平和的解決への希求は疑惑をもって記述され日
本は和平を欲する“ふり”(pretence)¹⁰⁾をしたと表現され、殆んどの教科
書が交渉の行われている最中にも真珠湾攻撃の準備が並行して行われてい
たと指摘している。しかし、同時に、アメリカのハル国務長官の交渉態度
についてもそれが非妥協的であったとする記述があり、会談の雰囲気伝
えている。例えば、“日本が譲歩すればするほどハルは日本は最終的には
屈服すると信じて高圧的に出た”¹¹⁾と述べられ、また、“ハルと栗栖はいつ
もある点まで同意に達しそうになり、再び同じ円をぐるぐるとまわり始め

た”¹²⁾と記されている。

また、このような交渉状態の中での要件は中国をめぐる日米の対立であったことが明記されていることもアメリカ史の記述にみられる特色である。その中で、アメリカが日本の中国およびインドシナ半島からの全面撤退を要求したことが項目別に記されている。しかし多くの教科書は同時に、中国問題に対してアメリカと日本が何故、互に譲歩出来なかったのかという理由も付記している。これらの理由は、アメリカが1800年代の終りから主張して来ている門戸解放政策が第一にあげられている。それに加えて、日米の立場の相違をも明らかにしている。このことについては次のような記述がみられる。すなわち

“最終的分析によれば唯一のゆきずまり点は中国であった。日本はアメリカが蒋介石に対するすべての援助を中止することを要求した。ハルは（アメリカが）中国人を見捨てることを拒否したのみならず、日本が中国から即時全面撤退することを要求した。非常に大きな面目を失うか、戦争に突入するかを選択に面して、日本人はやむおえず後者を選択した。¹³⁾

アメリカ史の日米交渉に関するこのような記述は、日本史のそれが交渉の行われた事実の記録に止まりそれ以上に日米対立の原因について読みとることが難しいのに対して、交渉の模様を色々の角度から記述することによって戦争へ突入せざるを得なかった状況を理解させる立場を採っていると言えよう。

ロ) 原子爆弾

日本史の原子爆弾の投下に関する記述は2行あるいは3行程度であり、後に述べるアメリカ史のそれと比較すると非常に短かく、また簡略でもある。殆んどどの教科書はポッドダム宣言にもとづく無条件降伏勧告が行われ、日本がソ連による和平斡旋を期待している最中にアメリカが広島と長崎に原子爆弾を落したと述べており、原子爆弾投下に至る史実を時間的推移に沿って記述しているこの記述パターンは20年間殆んど変化していない。僅

かの記述変化は原子爆弾が投下される直前の日本の状況をポッドム宣言の受諾を“無視”，あるいは“黙殺”した，“受諾について激論を交していた”，あるいは“検討中”と記述する部分に認められる。さらに，原子爆弾投下の主体者である“アメリカ”と言う主語が記述に欠如している教科書が6冊ある。このうち，1冊は“……日本政府はこの宣言（ポッドム宣言）を黙殺し……ソ連を通じて和平の斡旋を期待していたが，この間に8月6日に広島，9日の長崎に対する原子爆弾の投下という大惨事が起り……”¹⁴⁾と述べ，あたかもこの事件を自然災害のように記している。

原子爆弾による被害については1950年代初期の教科書中では，“人類史上類のない惨たる被害”，“悲惨な損害”，あるいは“壊滅的被害”と表現されているが，このような形容は最近の教科書では削除される傾向がある。また損害の具体性を示すものとして殆どどの教科書が広島市街の焼跡の写真を載せている。しかし，死者の数字については数冊のみが広島，長崎併せて20万人と述べているのみである。原子爆弾の被害特色として一般市民が殺傷されたことについては三冊のみが言及している。

このように，日本史の原子爆弾に関する記述は時代による変化は殆どなく，また，史実として記録するにも，原子爆弾投下の意味を伝えるについても不十分であろう。

アメリカ史では，原子爆弾投下に関する記述は日本史と比べてより詳細であり，具体的描写に満ち，かつ時代により記述に総合性が加味されてきている。殆どどの教科書が原子爆弾の投下をアメリカ大統領がこれまで直面した最も困難，かつ恐しい (aweful) 決定であったと述べている。1950年代初期の教科書が投下目的を，硫黄島ならびに沖縄戦の酷烈な戦闘と関連させ，もし米軍が日本本土に上陸した場合失なわれるかもしれない数百万のアメリカ兵士の生命を救い，かつ日本の降伏をはやめるためと記述し，併せて，キノコ雲，ならびに投下直後の広島市街の惨状の写真を載せている。死者の数も広島10万人，ならびに長崎8万人と述べている。これに対して1965年以降の教科書の何冊かは，上述のような記述に加えて原子爆弾投下

直後の惨状を当時の少年の日記文を挿入して伝え、また、後遺症の問題にも触れている。

多数の教科書はまた、原子爆弾投下の模様を詳しく描写しており、日本史が“壊滅的”あるいは“悲惨”な被害という言葉でのみ当時の状況を述べているのと大きな差である。原子爆弾が作烈した瞬間は“はげしい熱風を伴った”、“目のくらむような爆発”であり、そして“空気は災でつつまれた”と述べられている。また、原子爆弾投下直前と直後の広島市の模様を鮮明に記述している。

1945年8月6日午前8時15分、一機のヒコーキが日本の広島市に進路をとった。ヒコーキは高度を高くとり、ほんの僅かの人々しかそれに気づけなかった。なんの警報も鳴らされなかった、そして突然、広島市は一発の原子爆弾によって壊滅した。広島市の24万5千人の男女子供のうち10万が瞬時にして殺され、あるいはまもなく死んだ。¹⁵⁾

1970年以降の教科書中ではさらに、アメリカの科学者達の原爆投下に対する賛否の意見も記述されている。また、1965年以降出版された11冊の教科書は、原子爆弾が広島と長崎に与えた被害の大きさを考えると、原子爆弾によらないで日本を降伏させる方法があったかも知れないと考えるようになったとも述べている。1冊はまた、広島のみならず長崎にも投下したことに疑問を投げかけているのが注目される。

ポッドダム宣言と原子爆弾投下決定の関係も記述されており、1950年、1960年代前期までの教科書は、日本のポッドダム宣言拒否がトルーマン大統領の投下決定の第一要素であったとしている。しかし、1965年以降では、この問題の視野を広げ、無条件降伏はとうてい日本の承諾するところではなかったのが結局は原子爆弾にたよらざるを得なかった、あるいは、“ポッドダム宣言は、原子爆弾による破壊がどのようなものであるか述べていなかったのが、日本はそれを無視した”¹⁶⁾等の意見が加えられている。

アメリカ史が原子爆弾に関する記述をこのように時代の変化と共に新し

い解釈を加え、あるいは原子爆弾のもつ意味を多角的に捉え、その中で、アメリカによる原子爆弾投下行為の正当性をも主張していることは、日本史が過去年間殆せど一律的とも言える記述でこの事件を扱っているのと比べて注目されよう。このことは、原子爆弾投下の当時者であるアメリカ、被害者である日本と言う立場を超えて、歴史教科書の書かれ方の日米の相違について考えさせられる。

2. 日米の社会・文化制度に関連したトピックスの扱い方

これまで戦争に関連したトピックスの扱い方を通して日米の各々の教科書が相手国をどのように把握しているかの立場について検討した。最後に日本およびアメリカの国の社会文化的側面を教科書がどのように扱っているかについて検討してみる。

A) 日本史の中のアメリカ社会・文化についての扱い方

日本史では24冊の総てが一様にアメリカの諸々の制度が日本の社会・文化に与えた影響について述べている。たとえば、日本の近代化に際してアメリカの三権分立、銀行、郵便、ならびに教育制度が採用されたこと、クラークによって北海道にアメリカ式農業が普及したこと、さらに大正時代には、映画、ラジオ、アメリカ建築が紹介されたこと等が述べられている。また、アメリカ思想は自由主義あるいは功利主義と名付けられスペンサーの名前が挙げられている。この他、キリスト教の普及、ならびに美術畑ではフェノロサの名前がある。

このような記述を通してアメリカ文化の日本への影響の大であったことは伺える。しかし、その記述は「明治」あるいは「大正」期の文化と言う單元の中で行われていることとアメリカの諸制度の名称あるいは人名の列記に終始していることが特長である。従って、これら諸制度の背後にあるアメリカの国そのもの、あるいはアメリカ文化のもつ独自性等に関しては言及されていない。

B) アメリカ史の中の日本の社会・文化についての扱い方

上述のような日本史の記述傾向に対してアメリカ史では日米文化交流に寄与した人名としては64冊中わずか二名、建築家ライトとラフカディオハーンのみが出てくる。この他、ミッション活動について4冊、占領中のアメリカ文化の日本への影響について4冊、さらに数冊が日本の近代化にアメリカの農業、教育制度が採用されたことを述べている。

しかし、アメリカ史の日本社会・文化についての記述の特色は日本史のそのように制度的影響の羅列に止まるのではなく、日米間で起った歴史的衝突の原因と背景を説明する一環として日本文化の記述が行われていることにある。日本の社会・文化の特徴は大きく三つの領域について記述されている。

第一に、日系移民のトピックスに関連して日本の国民性について述べられている。例えば、日系移民は、アメリカ人にとって考えられないような条件のもとで生存し、繁栄し、低賃金で働くこと、物静かで勤勉な人種であること、小さな土地で集約耕作を行なうこと、また、よく働き、険約家である等、表現されている。この他、家族の団結力や教育熱心であることが現在の日系二、三世の活動を通して記されている。これらの記述は主としてアメリカ人による日系移民排斥運動の背景として記述されている。

第二に、日本の中国進出、特に満州事変と日中戦争の背景として、日本の風土、あるいは経済構造の特色が述べられている。具体的には、近代化と人口増加、耕作可能地の狭少、急速な工業化とそれに伴う資源の皆無性、ならびに原材料を国外に求めざるを得ない状況などが強調されている。

第三に、日本の歴史ならびに文化が第二と同様に満州事変から日中戦争に至る経過の中で記述され、主として日本の軍国主義の背景と天皇の位置を中心に記述が行われているのが特長である。

軍国主義と関連した日本の政治構造と天皇の位置について多くの教科書が述べている。これらの中で、日本の議会政治制度の特色として陸海空軍の議会からの独立とそれに伴う天皇の役割についての記述が行われ、天皇

の力が無力であったと述べる教科書が多い。例えば，“天皇は日本人に神のように崇められた。そして天皇は日本は極東のすべての国々を支配しなければならぬと確信する一団の人々によって補佐されていた”¹⁷⁾、あるいは，“天皇は大権を持っていたが実際は議会在議決したことを行うたのみである”¹⁸⁾としていずれの場合も軍部の議会からの独立を指摘している。

国民の天皇崇拝については、太陽神の降臨と考えられ神のように崇められたとして天皇への忠誠は宗教にも似ていたことを指摘している反面、天皇崇拝は軍部によって作られ (cultivate)、また利用 (used) されたとする記述も認められる。

アメリカ史の中の天皇に関するこのような記述に対して、日本史では満州事変から太平洋戦争に至るトピックスの中で天皇の役割については僅かに数冊が“統帥権”と言う言葉でのみ表現していることを考えるとその対比は注目されよう。

さらに、戦前の日本人の価値観ならびに行動様式等も主として日本の軍国主義を解明する立場から記述されている。日中戦争前後の青年将校の行動や信念は日本文化の優秀性の認識に基いていたことならびに彼等の行動は日本古来の武士道、即ち自制心、苦痛にたえること、死を怖れないこと、年長者への服従等に基いていたことが指摘されている。

このように日本の社会・文化的側面に関するアメリカ史の記述の特長は、と主として日本とアメリカの間に生じた軍事的衝突あるいは移民問題と言う日米間の政治的問題と関連して行われていることにある。また、なぜ日本が戦争を起したか、あるいは、なぜ日米関係が悪化したかと言うアメリカからみた説明が非戦争トピックスでない文化というトピックスの記述を通して直接的あるいは間接的に行われていることにある。このことは、アメリカの中の日本と日米関係を総合的に理解させようとする立場を現しているように考えられる。

V おわりに

日本史ならびにアメリカ史が各々、相手国および日米関係についてどの

ような内容と立場で記述を行なっているかについて検討した。両国の教科書に関する主な相違点をまとめてみると次のようになる。

日本史ならびにアメリカ史ともにその記述内容は同じように戦争に関連した両国の政治的および軍事的接衝についてのトピックスを多く含んでいる。このことは、歴史教科書の役割から考えて予想されよう。

しかし、これらのトピックスの強調の度合の比重ならびにトピックスの表現は日本ならびにアメリカ各々の国家事情を反映して時には大きく異っている。

両国の歴史教科書の記述は一貫してナショナリズム（国家利益の明確な主張とその擁護）の立場で行われている。しかし、このような立場をとりつつもアメリカ史記述の特長は歴史事実について多様な角度から解釈を行ない、また教科書の作成された時代により、あるいは同年代に出版された教科書のあいだにも解釈が異なる場合が多い。

これに対して日本史は、教科書の出版年代による記述変化は殆んど見当らず、どの教科書の記述内容と表現も酷似している。さらに日本史は史実の記録と言う立場で書かれる傾向にあり、アメリカ史のそれが、何故あるいは如何にして事件が起きたかと言う説明とその解釈を記述の中心においているのと対称的である。

本報告では、このような相違点を指摘し、今後における歴史教科書作成に対するひとつの資料としたい。

以上

参 照 文 献

I 本報告で使用した高校用日本史ならびにアメリカ史の教科書

A) 日本史

- 1) 和歌森太郎, 現代日本のなりたち. (上・下) 実業之日本社, 昭和26年
- 2) 家永三郎, 新日本史. 三省堂, 昭和27年
- 3) 東京大学文学部内史学会編, 日本史. 山川出版, 昭和27年
- 4) 肥後和男, 高等日本史. 大修館, 昭和28年

- 5) 広島史学研究会編, 日本史研究. 柳原書店, 昭和29年
- 6) 相葉伸, 小沢英一, 宮城栄昌, 新日本史. 清水書院, 昭和31年
- 7) 芳賀幸四郎, 新日本史. 池田教科書出版, 昭和31年
- 8) 坂本太郎, 家永三郎, 高等日本史. 好学社, 昭和32年
- 9) 有高巖, 平田俊春 高等日本史 日本書院, 昭和32年
- 10) 宝月圭吾, 藤木邦彦, 詳説 日本史. 山川出版, 昭和35年
- 11) 豊田武, 高等学校社会科日本史. 中教出版, 昭和37年
- 12) 小葉田淳, 新制 日本史. 教育図書, 昭和37年
- 13) 西岡虎之助, 高校日本史. 実教出版, 昭和37年
- 14) 藤木邦彦, 日本史. 秀英出版, 昭和37年
- 15) 川崎庸之, 北島正元, 菅野三郎, 標準日本史. 教育出版, 昭和37年
- 16) 時野谷勝, 原田伸彦, 直木孝次郎, 日本史. 実教出版, 昭和38年
- 17) 竹内理三, 日本史. 自由書房, 昭和39年
- 18) 弥永貞三, 安田元久, 高橋昌郎, 佐々木潤之助, 高等日本史. 帝国書院, 昭和39年
- 19) 後藤陽一, 松岡久人, 日本史. 修文館, 昭和40年
- 20) 石井孝, 風間泰男, 菱刈隆永, 日本史. 東京書籍, 昭和40年
- 21) 稻垣泰彦, 川村善二郎, 村井益男, 甘粕健, 日本史. 三省堂, 昭和40年
- 22) 坂本太郎, 高等学校日本史. 好学社, 昭和41年
- 23) 児玉幸多, 笠原一男, 井上光貞, 精選日本史. 山川出版, 昭和43年
- 24) 安田元久, 井上鋭夫, 大石慎三郎, 尾藤正英, 土田直鎮, 高等学校日本史. 帝国書院, 昭和46年

B) アメリカ史

- 1) Abramowitz, Jack. *American History*. Chicago: Follet Education Corporation, 1971.
- 2) Alden, John R., and Mageins, Alice. *A History of the United States*. Cincinnati, Ohio: American Book Company, 1967.
- 3) Allen, Jack, and Betts, John L. *History: U S A*. Cincinnati, Ohio: American Book Company, 1967.
- 4) Augspurger, Everett, and McLemore, Richard A. *Our Nation's Story*. River Forest. Illinois: Laidlow Brothers, 1954.
- 5) Baldwin, Leland, D. Warring, Mary B, Nida, Richard H. and Sims, Howard B., Jr. *History of Our Republic*. Princeton: D. Van Nostrand Company, 1965.
- 6) Bidna, David B., Greenberg, Morris S., and Spitz, Jerold H. *We the*

- People, A History of the United States of America*. Indianapolis, Indiana : D. C. Heath and Company, 1971.
- 7) Binning, Arthur C., Martin, Asa E., and Wolf, Morris. *This is Our Nation*. Princeton : D. Van Nostrand, 1953.
 - 8) Boller, Paul F., and Tilford, Jean. *This is Our Nation*. St. Louis : Webster Publishing, 1961.
 - 9) Bragdon, Henry W., and McCutchem, Samuel P. *History of a Free People*. Riverside, New Jersey : Macmillan, 1956.
 - 10) Bragdon, Henry W., Cole, Charles W., and McCutchem, Samuel P. *Free People*. Riverside, New Jersey : Macmillan, 1970.
 - 11) Brown, Richard C., Lang, William C., and Wheeler, Mary A. *American Achievement*. Morristown, New Jersey : Silver Burdett, Company, 1966.
 - 12) Canfield Leon, H., and Wilder, Howard B. *The Making of Modern America*. Boston : Houghton Mifflin, Company, 1952.
 - 13) Casner, Mabel B., and Gabriel, Ralph H. *Story of the American Nation*. New York : Harcourt, Brace and World Incorporation, 1964.
 - 14) Caughy, John W., Franklin, John H., and May, Ernest R. *Land of the Free, History of the United States*. Chicago : Rand McNally and Company, 1966.
 - 15) Current Richard, DeConde, Alexander, and Dante, Harris L. *United States History*. Glenview, Illinois : Scott, Foresman and Company, 1967.
 - 16) Curry, Richard O., Sproat, John G., and Cramer, Kenyon C. *Shaping of America*. New York : Harper and Row Publishers, 1972.
 - 17) Craven, Avery, and Johnson, Walter. *American History*. Boston : Ginn and Company, 1961.
 - 18) Drummond, Donald F., Frazer, Dorothy M., and Alweis, Frank F. *Five Centuries in America*. Cincinnati, Ohio : American Book Company, 1964.
 - 19) Eibling, Harold H., King Fred M., and Harlow, James. *The Story of America*. River Forest, Illinois : Laidlow Brothers, Publishers, 1969.
 - 20) Frost, James A., Drown, Ralph N., Ellis, David M., and Fink, Williams B. *History of the United States*. Chicago : Follet Educational Corporation, 1968.
 - 21) Freidel, Frank B., and Drewry, Henry A. *America : A Modern History of the United States*. Indianapolis, Indiana : D. C. Heath and Company, 1970.
 - 22) Gavian, Ruth W., Hamm, William A., and Freidel, Frank. *United States*

- History*. Indianapolis, Indiana : D.C. Heath, and Company, 1966.
- 23) Gavian, Ruth W., and Hamm, William. *The American Story*. Indianapolis, Indiana : D. C. Heath, and Company, 1954.
 - 24) Gelermino, Gerald A., and Gotti, Margaret. *Challengè of Our Heritage : A Social, Political and Economic History of the United States*. New York : Oceana Publications, Incorporation 1970.
 - 25) Gordon, Alice K. *The Promise of America*. Chicago : Science Research Associates, 1970.
 - 26) Graff, Henry F., and Krout, John A. *Adventnre of the American Pepole*. Chicago : Rand McNally Company, 1961.
 - 27) Graff, Henry F. *The Free and the Brave*. Chicago : Rand McNally Company, 1967.
 - 28) Groissier, Philip L. *Mastering American History*. New York : Keystone Publication, 1972.
 - 29) Hamm, William A. *From Colony to World Power : A History of the United Stetes*. Indianapolis, Indiana : D. C. Heath, and Company, 1957.
 - 30) Harlow, Ralph V., and Miller, Ruth E. *Story of America*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Incorporation, 1953.
 - 31) Hartman, Gertrude. *America, Land of Freedom*. Indianapolis, Indiana : D. C. Heath, and Company, 1955.
 - 32) Heller, Landis, and Potter, Narris W. *Our Nation Indivisible*. Columbus, Ouhio : Merrill, Charles E., Publishing Company, 1966.
 - 33) Hofstadter, R., Miller, William, and Aaran, Daniel. *United Sates : The History of a Republic*. New York: Prentice-Hall Incorporation. 1957.
 - 34) Johnson, Walter D. *United States Since 1865*. Boston : Ginn and Company, 1965.
 - 35) Liebman, Rebekah R., and Young, Gertrude A. *The Growth of America*. Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall, Incorporation, 1959.
 - 36) Link, Arthur S. *Growth of American Democracy : An Interpretive History*. Boston : Ginn and Company, 1968.
 - 37) Link, Arthur S., and Muzzey, David S. *Our American Republic*. Boston: Ginn and Company, 1963.
 - 38) Madgic, Robert F., Seabert, Stanley S., Stopsky, Fred H., and Winks, Robin W. *American Experience*. Menlo Park, California : Addison-Wesley Publishers, Company, 1971.
 - 39) McGuire, Edna, and Portwood, Thomas B. *Onr Free Nation*. Riverside,

New Jersey : Macmillan, 1954.

- 40) Moon, Glen M., and McGowan, John H. *Story of Our Land and People*. New York : Holt, Rinehart and Winston, Incorporation, 1955.
- 41) Muzzey, David S. *A History of Our Country*. Boston : Ginn and Company, 1955.
- 42) ——. *Our Country's History*. Boston : Copany, 1957.
- 43) Muzzey, David S., and Kidger, Horace. *The United Stotcs*. Boston : Ginn and Company, 1953.
- 44) Muzzey, David S., and Link, Arthur S. *Our Country's History*. Boston : Ginn and Campany, 1965.
- 45) Noyes, Hermon M., and Harlow, Ralph V. *Story of America*. New York : Holt Rinehart and Winston, Incorporation, 1964.
- 46) Platt, Nathaniel, and Drummond, Muriel, J. *Our Nation From Its Crention*. Englewood Cliffs, New Jersey : Prentice-Hall Incorporation, 1972.
- 47) Quillen, James I., and Krug, Edward. *Living of Our Country*. Glenview, Illinois : Scott, Foresman, and Company, 1951.
- 48) Reich, Jerome R., and Biller, Edward L. *Building the American Nation*. New York : Harcourt, Brace and World Incoration, 1968.
- 49) Reich, Jerome R., Strickland, Arvarh E., and Biller, Edward L. *Building the United States*. New York : Harcourt Brace Jovanovich Incorporation, 1971.
- 50) Riegel, Robert E., and Haugh, Helen. *United States of America*. New York : Charles Scribner's Sons, 1951.
- 51) Roberts, Myrtle B. *Pattern for Freedom : A History of the United States*. Philadelphia, The John C. Winston Company, 1953.
- 52) Schwartz, Melvin, and O'Conner, John. *Exploriog American History*. New York : Globe Book Company, Incorporation, 1968.
- 53) Shafer, Boyd C., Augspurger, Everett, and McLemorc, Richard A. *United States History*. River Forest, Illinois : Laidlow Brothers, 1966.
- 54) Southworths, Gertrude anp Southworths, John. *Story of Our America*. New York : Iroquois Publishing Company, 1951.
- 55) Steinberg, Samuel. *The United States : Story of a Free Pcople*. Rock-leigh, New Jersey : Allyn and Bacon, Incorporation, 1954.
- 56) Todd, Lewis and Curti, Merle. *Rise of the American Nation*. New York : Harcourt, Brace Jovanovich, Incorporation, 1964.

- 57) Ver Steeg, Llarance and Hofstadter, Richard R. *A People and A Nation*. New York: Harper and Row Publishers, Incorporation, 1971.
- 58) Wade, Richard C., Wadel Louise C., and Wilder, Howard B. *History of the United States*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1970.
- 59) West, Willis, and West, Ruth. *Story of Our Country*. Rockleigh, New Jersey: Allyn and Bacon, Incorporation, 1960.
- 60) Wilder, Howard B., Ludlum, Robert P., Brown, Harriett M. *This is America's Story*. Boston: Houghton Mifflin Company, 1954.
- 61) Williams, Harry T., and Wolf, Hazel. *Our American Nation*. Columbus, Ohio: Merrill, Charles E. Publishing Company, 1966.
- 62) Wilson, Howard, and Lamb, Wallace E. *American History*. Cincinnati, Ohio: American Book Company, 1962.
- 63) Wirth, Fremont P. *The Development of America*. Cincinnati, Ohio: American Book Company, 1954.
- 64) ——. *United States History*. Cincinnati, Ohio: American Book Company, 1958.

II 引用文献

- 1) “高校用アメリカ史の教科書における日本に関する記述変化, 1951—1972.” 日本比較教育学会紀要第三号, 第3号 1977, p. p. 63—68.
- 2) Spieske, Alice W. “Bibliography of Textbooks in the Social Studies. 1952—1956.” *Social Education*, XVII—XX, No.8 (December, 1953—1956), pp. 210, 366-367, 367, 376. Vanaria, Louis M.” *Bibliography of Textbooks in the Social Studies. 1957-1959.*, *Social Education* XII—XIII, No. 8 (December, 1958-1959), pp. 399, 390.
- 3) Bowker, R. R. *The American Educational Catalogue*, 1955. New York: R. R. Bowker Co., 1955.
- 4) Bowker, R. R. *Textbooks in Print*. New York: R. R. Bowker Co., 1957, 1962, 1966, 1970, 1971 and 1972.
- 5) Hofstadter, Miller and Aaron, *United States: The History of Republic*, p. 566.
- 6) Allen and Betts, *History: U S A*, p. 456
- 7) Platt and Drummond, *Our Nation from its Creation*, p. 652
- 8) 竹内, 日本史 p. 287
- 9) Wirth, *United States History*, p. 517 (1958)
- 10) Roberts *Pattern for Freedom*, p. 535
- 11) Limk, *Growth of American Democracy: An Interpretive History*, p. 615

- 12) Graff and Krout, *Adventure of the American People*, p. 625
- 13) Link, *op cit.*, pp, 614—615
- 14) 相葉, 小沢, 宮城 新日本歴史 p. 281
- 15) Todd and Curti *Rise of the American, Nation*, p. 726
- 16) Wade, Wade and Wilder, *History of the United States* p. 578
- 17) Liebman and Young, *The Growth of America* p. 408
- 18) Drummond, Frazer and Alweis, *Five Centuries in America*, p. 577

A Comparative Study on the Treatments of Japan and America in Japanese and American High School History Text Books

Kikuko Kambayashi

Abstract :

The purpose of this study is to examine what about and how Japan and America try to teach the historical relationships of two nations in their schools. It was hoped to find out, in comparison, a way which Japan and America cultivate national identity and understanding of other nation through the study of their national history textbooks.

The author compared the treatments of Japan in American history textbooks, and those of America in Japanese history textbooks used at senior high school, level, respectively. Twenty-four Japanese history textbooks published from 1951 to 1971, and sixty-four American history textbooks published from 1951 to 1972 were chosen in this study. Three methods were used to compare the treatments of Japan and America in these textbooks. : 1. to make a list of twelve historical topics out of the whole content in the both textbooks; 2. to count the textbook coverage given to each topic in order to find out the degree of emphasis among the topics; and 3. to examine the treatments of selected topics in terms of their expression, the stand points taken to describe the event, and the trend in the treatments. The examination was made on the treatments of 1. the topics regarding the wars (Sino-Japanese War, the First World War, the Disarmament Conferences, and the Pacific War), 2. the topics regarding social-cultural systems of the two nations (Japanese social-cultural system in America, and American social-cultural systems in Japan).

The author found that both Japanese and American textbooks placed almost equal emphasis on the description of the wars they were directly or indirectly involved. However, there were certain differences in the treatments of the topics. American textbooks tended to interpret historical events from various points of view and their interpretation were varied depending on the author or publication year of the textbooks. Japanese textbooks showed little variation in the treatments of the events for almost twenty years. Furthermore, American textbooks explained an event in a manner of why and how it happened, but Japanese textbooks presented the events in a pure historical record.